「菊花の約」をめぐって

李　仁　燁

〈目　次〉

Ⅰ 序　論
Ⅱ 本　論
1.「菊花の約」の典據
2.「菊花の約」と原典との相異
3.「菊花の約」における描寫
4. 書き出しと結句
5.「約」の讀みをめぐって
Ⅲ 結　論

Ⅰ 序　論

「菊花の約」は「雨月物語」[1]の卷の一に收められた怪談物語である。本篇は中國の白話小說集[2]『古今小說集』の「范巨卿鷄黍死生交」[3]の翻案である，秋成(作者)はこの原話にいくつかの改變を加え，彼自身の美の世界を創造していったのだった。

家が裕福であり，養父母にかわいがられた上田秋成(一七三四年)は，青年時代からかなり自由な生活を送ったようである。俳偕をやって見たり，友人と遊び歩いたりしたが，友人との關係で小說や學問などの亂讀もした。若い頃から文學に熱中したが，その後日本の國學にも興味を覺えて，「雨月物語」のような文學と學問の結びついた作品を書いた。日本の古典を巧みに驅使し，しかも自由奔忙な獨特なスタイルを作って美文を創造している。巧みな文章と鋭い觀察眼とを持つことは，文學者としての第一條件であるが，それを兼ね持ったところに秋成の天性の文學者肌があったのだと

1）雨月物語，江戸時代讀本
　作者 前枝崎人(上田秋成)
　名稱 近古奇談 雨月物語
　刊行 明和五年 1776年
　　卷册 安永五年版の半紙本五册(五卷九話).

2）白話小說
　白話とは中國で日常に使用する話しことば．國語．
　白話小說とは宋代の『說話』に發し，元末，明初に「水滸傳」，「西遊記」，「金瓶梅」，「三國志演義」なととなって開花した口語体の小說

3）范巨卿鷄黍死生交，中國の「白話小說集」，「古今小說集」卷十六，「菊花の約」の原案である

思われる。

この作品の主人公は文部左門と赤穴宗石衛門である。左門は年老いた母と二人暮しの清貧の儒者として描かれ，旅の宿で病氣に苦しむ宗石衛門を助ける。病癒えて宗石衛門が自らの[4]身分を明かす。それによると，彼は雲州富田の城主鹽冶掃部介[5]の家臣で，兵學に心得ある士であった。宗石衛門が君主の命で守護大名の佐々木氏綱[6]のもとに行っていた留守中に，鹽冶は尼子經久に[7]伐たれたとの情報が入る。經久に反擊したく宗石衛門は思ったが，佐々木氏綱の反對にあって願いを果せず，一人富田へ様子を見に行く途中であって，この病いになった，と說明した。左門は宗石衛門の忠臣なる心情を見，さらに學問に造詣深い人物であることを知って信頼し，遂に兄弟のさかいをするにいたる。そのうちに宗石衛門は故郷の様子が心配なので雲州へ下る，左門母子に別れを告げ來る重陽の九月九日には必ず戻ると約束をして出發した。が約束の日に來られず，自害をしてその亡靈がくるという話である。「菊花の約」は幽暗な怪異世界の戰慄的な美を中心とする「雨月物語」にあって信義を貫く男同士の友情の美しさと嚴しさを描いたものとして有名である。

またこの信義は當時の武士社會の動きと對立し，權謀術數を巡らして保身と榮達とをはかろうとする行き方に對する嚴しい批判の意味を擔っているのであり，邪惡，不信義の横行する當代武士社會の在り方を嚴しく糾彈することでもあった。

石の様な荒筋をもって展開する「菊花の約」について，本論では，先づその典據を探り，それが如何にこの作品に取り入れられたかをみ，更に，この作品に用られた描寫の方法，技巧を味わい，作品のテーマとも云うべき冒頭部分と末尾部分との照應にも觸れ，最後に作者獨特の漢熟字にけした振り假名の面をも考えてみようとするものである

Ⅱ 本　　論

1.「菊花の約」の典據

上田秋成はこの物語で，都賀庭鍾[8]の「英草紙」・「繁野話」[10]二書の行き方に從ったことは周知

4）富田，島根縣能義郡廣瀬町

5）鹽冶掃部介，－近江の佐々木氏の守護代官としての富田城にいたが文明十八年十二月尼子經久に攻められ戰死.「鹽冶」は出雲國飯川郡の鄕名.

6）佐々木氏綱－近江の佐々木高頼の子六角貞頼の兄.

7）尼子經久，前の富田の城主，

都賀庭鍾 岡島冠山の弟子，中國の「今古奇觀」を翻案して，寛延二年(1749年)に「英草子」，「繁野話」，(明和三年)，「鹽根草」，(明和七年)，「莠句册」，(天明六年)など中國小說の翻案．小說作者(近路行者とも呼ぶ).

9）英草字：中國小說の翻案小說(五卷五册) 作者 都賀庭鍾.

シナ小說「今古奇觀」を粉本としにことを示す.「古令奇談前編」.

10）繁野話 英草子の續編.

のことである。つまりこの一篇はまことに庭鍾風にならった翻案小説である。據書は明の馮夢龍と推定されている茂苑野史の編にかかる白話小説集「古今小説」第十六「范巨卿鷄黍死生交」である。白話小説とは中國の宋以來流行した說書家，日本流にいうと講釋師の國演の間に成長して來た話本の定着したもの。またはその風体を摸した小說である。したがって白話當時の俗語を混じている。日本では享保[11]以來知識人間に大流行で，この類の書籍が，長崎へ唐船が着くごとに舶載されたさまは「舶載書目」という，當時の一種の帳簿に詳かである。秋成はこの書をどこで見たかわからないが，日本ではいま，內閣文庫[12]に一本が藏され，中國における翻案も，この本によったという珍本となっている。閑話休題。「死生交」一篇は，遠く「後漢書」卷七十一「范式傳」を原話として成長した話でその梗概は次のごとくである。

漢の明帝の時，汝州南城の農家ながら學問熱心な張劭(字は元伯)が，時の都洛陽に官史登用のための試驗を受けに行く。これを中國では選擧と稱する。洛陽も近くなった一驛の宿り，隣室に瘟病に苦しむ旅人に逢う。見れば同じく選擧人。劭の看病いたらざることなく，その旅人の病は癒えたが，時すでに試驗の期日は經過していた。この旅人は楚州山陽の商人范式（字は巨卿）である。相語って意氣投合，ついに義兄弟の契りを結ぶ。しかし二人とも故鄉に，一は妻，一は母と弟の待つ人を待っている。故鄉の旅の別れ路に達した日が，ちようど九月九日，重陽の節供である。別の酒を吸み交わして，母のない范式は言う。來年の今月この日，汝州の張劭を訪い，禮も言い舊交もあたため，その母を自分の母として拜したいと。劭は何はなくとも鷄と黍[13]を準備して，その日はきっとお待ちすると約束して別れた。光陰迅速，早くも一年，約束の日は來た。劭は早朝から，母が式の姿が見えてからと注意するのにも，いな，巨卿は信士だからと，契ったとおり鷄と黍とを整えて，待つこと終日，式の見えないままに深更になった。月は落ちて陰々たる中に，風に。隨ってふらふらと范式があらわれた。喜ぶ劭の饗應もうけなければ，顏に憂色が深い。さもざもと氣を便う劭に對して自分はもはや，この世の人でないと告げる。實は約束を忘れたのでないが，日々の商賣に追われ，今日になって別れの日に吸み交わした茱萸酒を近所から送られて，重陽であることに氣づいた。約束は違うべからず，道遠くして行くべからず。人の行けない千里の道も魂は行けるの言葉を思いだし，劭の芳意にむくいるべく，自刀してきたのである。自分の輕忽は許してほしい。願わくは山陽を訪うて屍を一見してくれと長々と語った。止めんとする劭の前に，式はあらず，ただ陰風の面を拂うのみ，大いに哭く劭に驚く母は，一々事情を聞いたが初めは信じられない。ついに母も信ぜざるを得なくなる。翌日張劭は，母は弟に記し，ねんごろに別れを告げて楚州に急ぐ。山陽につくと葬いの場につきあたった。劭が巨卿の柩かと問うと，つきそった喪服の女が旅姿を見て張劭かと問う。これ式の妻で，夫が劭が來てから葬れと，遺言した。しかしおいでが遲いので

11) 享保，江戸時代 中御門天皇，櫻町天皇時代の年號(1716－1736年).
12) 內閣文庫，內閣所藏の書物を保官し各廳や學術研究者の利用を圖る總理府所管の文庫.
13) 鷄黍，「にわとり」と「とうもろこし」.

今日葬ろうとしたが柩が動かなくなってと詳述する。劭は哭倒，悲痛な祭文をささげて，ともに葬られんことを人々に頼んで自刎した。明帝は信義に厚いこの兄弟に感じ，信義之祠とよんでともに伯の爵を送った。子孫一族はともに榮えたという。

秋成はこの原據によって，病による二人の境遇から義兄弟の盟，別離と約束，約束の日に友を待つ一人の態度，約に參じ得ぬいま一人の死によっての再會とその場面，そして死んだ友の故郷に走せておもむく樣子など中心部分をことごとく拉し來た。また文章の學ぶべきも，おしみなく奪っている。視にこの卷頭の美文は，原據の「結交行」をほとんどそのままを和譯したものであった。それにしても冒頭，すなわち枕の部分において，本篇の主題の，信義にあることを述べて，この一篇にふさわしい莊重な文章ではないか。

しかし秋成が「死生交」に倣ったところよりは違えたところに，彼の手腕があるはずである。この一篇の鑑賞はそうした点をおさえることを一つの目途としてみよう。とすると冒頭につづく主人公らしい人物の紹介からしてすでにかわっている。丈部左門は「白峯」[14]の登場人物，西行[15]や崇德院[16]の如く史上著名な人物でない。よってその人がらを述べること詳かに，中國人には史上著名な人物である范式，張劭の出し方と違っている。もう一つ違ったことは，張劭の農家なることは中國では變化できない話であったろうが，秋成はこれを儒者にとりかえた。彼のその邊りの考えはしだいに，効果をともなって明瞭になるであろう。

2. 「菊花の約」と原典の相違

「死生交」では科學の試驗に應ずるために　農家と老いた母を弟張勤に記して洛陽に向った張劭は，旅の宿で病いに倒れた范式を看病するうちに試驗の期日に遲れてしまうのであり，立身の機會を失せたことをわびる范式に對しても，「大丈夫以義氣爲重，功名富貴・及微末耳・已有分定・何悞之有。」と述べて慰めている。

このことを作品全体の構想に即して見れば，二人が兄弟の盟を結ぶのは，立身の機會を失ってまで看護の手を差し伸べてくれた張劭に對する范式の「情如骨肉」によるのであり，命を賭けて信義を守るという二人の行爲は，立身出世への願望と對比せられているといえる。讀者の感動は，立身の機會を捨ててまで厚い看護の手を差し伸べた張劭の暖かい心と，その溫情と信頼に死を賭けて應えた范式の誠意ある行爲に集中するのであり，作者も明帝をして兩人の行爲を讃美させ，兩人が登第しないにもかかわらず，范式に山陽伯を，張劭に汝州伯を贈らせている。これも庶民世界の

14) 白峯，『兩月物語』の中に收められた冒頭作品.

15) 西行，「白峯」という作品の中で「ワキ」役さする歌僧.

16) 崇德院，「白峯」作品中で「シテ」主役をする主人公. 日本の第七十五代天皇で皇位を中心に爭ふ保元の亂で敗北し，讃岐に流刑された.

素朴な友情の交歡として捉えられるものであろう。また，科擧の試驗という貧困からの脱出の唯一の機會を，ふと旅宿で泊り合わせた同じ志願者の不運への同情から失ってしまうところに，庶民の淳朴さが生む哀歡が描かれている。

これに對して「菊花の約」では，同じ里○何某を訪ねた左門が，そこで出雲に歸る途中疫病にかかって苦しんでいる宗石衛門を知り，心からの同情と學者としての信念から手厚い看護を施している。

ここでは，「死生交」で意圖された，立身出世への願望を捨てることによって二人の命を賭け信義が成立し，讀者の感動を呼び起こす，という構想は消去せられている。

「菊花の約」においての二人の兄弟の盟を結ぶ事情はつぎのように記されている。

此日比左門はよき友もとめたりとて，日夜交はりて物がたりするに，赤穴も諸子百家の事おろおろかたり出て，問わきまふる心愚ならず。兵機のことわりはをさをさし聞えければ，ひとつとして相ともにたがふ心もなく，かつめで感，かつよろこびて，終に兄弟の盟をなす。

ここには，「學ぶ所時にあはず青雲の便りを失なった孤獨な左門と，はやく父母に死別し故國を敵に奪われて流浪の境遇にある宗石衛門が，世に横行する邪惡，不信義を憎む直情徑行の性情と，互いの學識，信念を認め，共鳴することによって堅い盟約を結んだことが示されている。

范張の兄弟の盟が，張劭の溫情に意激した范式の「情如骨肉」によって成立したのに對し，秋成は，左門と宗石衛門の盟を，對等な人間と人間との，互いの境遇と信念の共通性に立脚した，全人格的なものに對する共鳴基盤として成立したことに變えたことを示していると言える。原話が持つ感傷性を消去し，信義を人間精神の一の極致として描こうとする意圖を表わしたものと言えよう。これは「死生交」では再會の約束を履行するか否かは，張劭の恩義に對する范式の誠意の表わし方の度合いを示していたのに對し，宗石衛門が約束を破ることは，全人格を否定されることを意味しているということが出來る。

また「死生交」では范式と張劭は，一年後の重陽の日に范式が張劭の家を訪ねることを約して別れ，それぞれの故郷へと歸っていくのであるが，宗石衛門は左門の家に逗留して左門母子と親交を結び，やがて重陽の日に再來することを約して故郷へ歸って行く。「死生交」に比して，「菊花の約」では，再會の約束を信じて待つ者と，故郷に歸ったのち信頼に應えて再來する者とが明確に位置付けられているのであり，この設定によって，やがて，約束の日に，宗石衛門の信義に對する强固な信頼と，それでもわき上って來る危惧の情との入り亂れる胸中を迎えて，終日門前で待ち續ける左門と，尼子の城内に幽閉され，苦惱と焦慮の果てに自刀して，陰風に乘って音もなく來訪する宗石衛門との間に，靜と動の對照と異常な迫力を生み出し，鮮烈な感動を呼び起こすと言う効果を上げているのであるまた再會の期日の定め方に「死生交」では，范式と張劭の別れの日が重陽の佳節であり，再會の期日が一年後の重陽の日に定められたことはきわめて自然であるが

，左門と宗石衛門の再會の日が重陽の日に定められたことには，原典におけるような必然性や妥當性はない。きわめて偶然的な取り決めであると言える

3. 「菊花の約」における描寫

相別れて數ケ月・約速の日を早くも迎える。秋成はこの物語で，叙景・抒情の場合には必ずといってよく和文調や和漢混淆の美文をもってする。叙景・叙情とわかったが，彼の教養からして古典的な量と情とが相表裏したもので，景を述べては情を籠め，情をのべては景を寫すの風である。ここも多くの讀者を感心させて來た美文を挿入したが中にそれとなく「黄菊二枝三枝」を加えて，本篇の題を，香り高くにおわせている。友を待った左門の焦躁を直接に寫し出さず，かえって旅人の悠長な無駄話で，やがて高揚する場面の前に，小休止をおいたのも，彼の心憎い創案でである。もちろん讀者は，旅人の話に氣をいらち，ここで取り上げてないかずかずの足音一つ一つに赤穴宗右衛門の出現を期待している左門の心胸を讀み取らなければならない。

作家がある事柄を讀者に傳えたいと考える場合に，そのことに關して精密な描寫を行うことも勿論一つの方法である。しかし精密な描寫が必ずしも最も効果的な方法とは限らない。直接そのことには觸れずに他を叙述することによって，もっと効果的に作者の言いたいことを表現してしまう方法もある，即ち「菊花の約」において，まず宗右衛門の來ることを信じて一点の疑いを持たぬ左門の行動が描かれる。そしてそこから筆は左門を離れ，ちようど左門の氣持のように一点の雲もない晴れ渡った空が述べられる。讀者たる我々も，ここで，少しの翳りもない晴れやかな氣持を持つことが出來る。そしてその後は街道における旅人達ののどやかな會話である。これは左門の家の前の描寫であるが，我々讀者ものどやかな氣分がここで得られる。しかし，やがて日は西に沈み，街道を歩く人の足もせわしげになってくる。我々もまたせわしげな氣持を体驗することになる，そして，最後に我々が見出すのは「銀河形きえぎえに氷輪我のみ照して淋しきに，軒守る犬の吼る聲すみわたり，浦浪の音ぞここもとにたちくるやう」な情景の中に一人佇(タタズ)まなければならなかった自分自身の姿である。勿論，論理的に言えば一人立ちつくしているのは左門である。しかしこの文で，「氷輪[17]我のみを照して淋しき」という個所で，「我」という言葉が使ってあることに注意したい。三人稱で書き進められてきたこの小説において，ここに至って突如「我」という一人稱が出て來ても我々は不自由に思うことなくこれを受け入れている。「我」とは讀者自身である。讀者はここで淋しい夜の中にただ一人立ちつくさなければならぬ孤獨感を味わされているである。

つまり，この一日の描寫によって，我々讀者はちようど左門と同じような心のうつり變りをみずから体驗させられているのである。ここの描寫には，左門がどのように氣持を刻々と變化させていったかについてのくわしい叙述はない。しかし我々讀者は，翳りのないのどかな氣持からあせりの

17) 氷輪，月の異名.

氣持へ，そして孤獨感へという具合に，次第に氣持が變化して行くことをこの文によって体驗させられてしまっている。そして，この讀者の氣持の移り變りが，そのまま，宗右衛門を待つ左門の一日の氣持の變化なのである。もはや我々は，淋しい夜の中にただ一人立ちつくす左門の孤獨を，自分とは無緣のものとして他人事に考えることは出來ない。それ以前ののどやかな氣持との對照上からも，一層强くこの孤獨感を我が物として身にしみて感じないわけにはいかないのである。「菊花の約」においては，宗右衛門を待つ左門の氣持の變化を直接に描寫することなく，他を叙述して讀者に左門と同じ氣持の變化を体得させた。直接に描寫することなく，他を叙述して讀者に左門と同じ氣持の變化を体得させた。直接に描寫することには文章の性質上おのずから限界かあり，又，ややもすると說明に墮してしまうこともある。こうしたことをよく心得ている秋成は，自然に筆を他へ移し，他を叙述する如くにして，讀者の心に自分の傳えたいことを効果的に入れてしまっているのである。

それと同時に，「菊花の約」の先に引いた文の場合には，讀者に左門と同じ氣持の變化をさせており，ついには讀者自身が淋しい夜の中に一人立ちつくすような感じを與えているのである。つまり，讀者をしてその場に實際に居たかのような感じを抱かせることにも成功していると言えよう。

秋成はなるべく讀者をその世界の中に引きずり込みたいのである。よそよそしい氣持で遠くから眺めているような感じを讀者に與えてしまってはならないのである。あくまでも作中人物と讀者は一体化して文學作品の世界の中で行動して貰いたい。それでなければ，讀者は小說を讀むことによってもう一つの人生をみずから体驗したという滿足感が得られないのである。小說というものは知識を得るために讀まれるものではない。知識を得ることが目的で讀むものであれば，遠くからよそよそしく眺めているような感じを持たされても，讀者は滿足していられるが，小說の場合には，いま自分のいる人生と違った人生にちよっと入ってみたいという，そうした讀者の慾求を滿足させなければならないのである。だから作者は，讀者が作中人物と一緒になって喜んだり悲んだり驚いたりするように，小說を作っていかなければならない。そのためには，作中人物に陰影や厚みをつけて，讀者が現實感を持って作中人物に接することが出來るようにすることも必要だし，讀者が不自然さを感じないように狀況を說定することも重要である。そうして，それと同時に，讀者に臨場感を持たせるような書き方をすることもまた大切なこととなってくるのである。

「菊花の約」の九月九日の描寫においても，我々は左門と同じ氣持の變化を体驗させられている。そしてついには「氷輪我のみを照して淋しきに」となって「我」という言葉が讀者自身であり，讀者自身が夜の中に立ちつくしているような感じを持つに至る。讀者に臨場感を持たせるための秋成の配慮を，我々はここに見出せるのである。このように考えて見ると，

「雨月物語」は，讀者を作中に引きずり込むような周到なる用意がしてあると言うことが出來るのである。

「雨月物語」は怪談小說である。從って「雨月物語」を讀んで行くと，讀者の常識をはみ出るような超自然的な出來事が次々と起る。いくら江戶時代の讀者であっても，こうした超現實的な現象の存在をすべて信じていたわけではあるまい。そのような讀者に，作中人物と同じような驚きや恐れを感じさせることは並々ならぬ手際が必要である。作中人物との一体感を讀者に持たせるには，こうした点において，きわめて重要なことなのである。そして「雨月物語」が近世に數多く現われた他の怪異小說に較べて，はるかに緊張感を讀者に與えるものになっているについては右のような作者の技法が大きな力になっているように思われる。

4. 「菊花の約」の書き出しと結句

次は「菊花の約」の冒頭文である。

> 靑々たる春の柳，家園に種ゆることなかれ。交りは輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも，秋の初風の吹に耐めや。輕薄の人は交りやすく亦速かなり。楊柳いくたび春に染れども，輕薄の人は絕えて訪ふ日なし。

と結語の部分は次の如くである。

> 吝輕薄の人と交りは結ぶべからずとなん。

とである

冒頭と結語とは主題の信義話に對して逆說的な意味においておかれているし，冒頭の律語的美文は，その美文的性質の强烈さのために，中本文の要素に强度の美文を誘い出し，それらの作り出す美的情緖によって筋の不自然を救い，その不自然さのゆえと相まって，逆に强烈な感銘を與えるのである。

言うまでもなく，「菊花の約」は『古今小說』第十六卷「范巨卿鷄黍死生交」を作品全体の構成に關わる典據とし，一部分の構成のために和漢の文獻や作品を參照して作り出された典型的な翻案小說である。

秋成の創作方法は，措辭や字句の一部などを示すことによって，典據とした文獻や作品の內容について知悉していることと，「菊花の約」の內容のように，典據とした文獻や作品の內容を重ね合わせ，典據の內容の取捨撰擇や改變に込められた。秋成の創作意慾や構想の獨自性を理解してくれることを要求するものであったと考えられる。

「雨月物語」の中で「菊花の約は出來がよく書き出しが全くすばらしい。靑々たる春の柳，家園に種ゆることなかれ。交りは輕薄の人と結ぶことなかれ云々と輕薄の人のことを議論のように書い

たすぐあとで，文部左門と赤穴宗右衛門とが不意に出合いする。讀者は書き出しに輕薄の人とあるだけに，何れは輕薄な交りの實例が書かれてあるものだと思い込む。そうして赤穴は身分の知れない行路病者だけに，この男が問題を起す輕薄漢なのだろうと思う。ところが彼等の友愛が美しいものになって發展して行く。はてなの，と思っている漢に，赤穴は突然，一度歸國して來ると言いだすだろう。そこで讀者は，そら始まったと思う。そうして始めつからの用心が一層緊張して來る。ところがこの赤穴宗右衛門が命を捨てても約を果すという人物なのだから，讀者の豫想はまるで裏切られる。しかも美しく裏切られる。發展の効果が異常なために，感に打たれることが異常に深い。あの起筆に千鈞の重みがあるのだよ。まあ假りにあれの書き出しが，青々たる春の柳ではなく，不用意にも正面から，歳寒くして松栢の色を知るとでもなっているとしたら，あの話は藝術的感動が稀薄になって，只平凡な道話的色彩以外には，或は人にアツピイルしないかも知れないのだ。…それに結末のところでやっぱりもう一度，吝輕薄の人と交りは結ぶべからずとなむ。と切ったのもいい…」最初と最後が同じ意味になっている。前後で輕薄な人間を直接にたしなめで置いて，內容はその反對の實例を見せているのだ。我々は讀み去って，最後が最初と同じなだけに，もう一べん，書き出しに返って來たような氣がする。そうして，最初は單に物好きな緊張で讀んで來たものを，今度は純然たる深い感動で，もう一べんゆっくり味い直す。こうしてあの話の氣持は，頭も尻尾もない。無限にめぐる不思議な一つの環だ。永久に消えないような余情を湛えている……」。

5. 「約」の訓讀みをめぐって

以上，「菊花の約」について一應の考察をつづけて來たが，次ぎに「約」の訓讀みをめぐって，秋成がそこに如何なことを暗示しようとしたかを考えてみる。

秋成の文体は擬古文に近く，つづく京傳，[18]馬琴[19]へも影響して，そこに讀本体とも云うべき新文体を開くもとになったと云われる。そして，主要な漢字の熟語には和訓を付している。もっとも，當時の讀本を初め，[20]草双紙，酒落本，[21]滑稽本[22]など何れも謂う所の，「振り假名」が付され

18) 京傳，山東京傳(1761－1816年)
戯作者，浮世繪師，本名は岩瀨傳蔵．江戸の人．早くから草紙の挿繪を書いて有名になり，黄表紙．酒落本作者．

19) 馬琴，曲亭馬琴(1767－1848)，江戸時代の讀本・草雙紙作者．1803年讀本「月氷奇緣」を出して好評だった．

20) 草雙紙，江戸時代中期から江戸に起った赤本，黑本，青本，黄表紙，合巻の順序で展開した繪草紙の類の總稱である．

21) 酒落本(1818－29年)まで行われち小册で，挿繪入りの文章さ主としたものである酒落とは當時において通と滑稽の二つの意を持っていて，內容は會話体で遊里生活を描寫し，その特徴とするところは通・穿ち・滑稽にあり，半可通の失敗を笑い，遊里での通人の遊での描いちものである．

22) 滑稽本，酒落本の遊里趣味から遠ばガり，もつと健康な社會を描こうとして，その滑稽の部分を引き継いだ笑いの文學である．

て居り，意味を漢字で，音は假名と云う二行併讀，二重表記の構造をもっている。（時には「振り漢字」とでも云うべき，假名で書かれた語の意義を明示する爲めにそのわきに漢字を付ける事さえある）。もともと「振り假名」と云うのは，漢字の讀みを示すためにそのわきに付ける假名であった。讀みの困難な漢字に假名をそえる，所謂「ルビ」である。文章全体にわたり漢字に「ルビ」[23]付ける「總ルビ」[24]，また文章中のある漢字に「ルビ」を付ける「パラルビ」[25]など，さらには，同じ漢字に別の讀み方があり，誤りやすい時とか，特別の讀み方をさせようとするとき，或は同義的な二語，漢字と假名を，視覺的に結びつけで特殊な表現効果を生み出そうとする—こうしたことが「振り假名」のはたらきだと云える。しかも秋成は，この稱な「振り假名」と漢字とが同意義であるべき筈の原則を超えて，この二つの意味をずらす事によって，その傳えようとする意味を更に複雜なものとして効果を上げている。つまり・本來の「振り假名」の意義以上の効果を作品の中でねらっている稱である。

尙，『雨月』の中に三ケ所，即ち

『畫ける魚紙繭をはなれて——』では「紙繭」の右に「しけん」左に「かみきぬ」

（『夢應の鯉魚』）

『禿驢いづくに隱れけん——』では」「禿驢」右に「とぐら」左に「くそぼうず」

（『青頭巾』）

『荒唐なりとやせ人——』では「荒唐」の右に「くはうとう」左に「とりじめなし」

（『貧福論』）

の稱な，熟語の右に讀み方，左に和訓と云った左右に振り假名をつけて音訓を示す方法もとっている。

ここで，次ぎに考えこみようとしたことは秋成がこの「菊花の約」の中で，「約」の和訓を付すに際して，その訓讀みの中に，どんな事實を暗示しようとしたのか，どんな意味をこめようとしたのかと云うことである。

標題の「菊花の約」の「チギリ」は除いて本文中（四百字詰原稿用紙にして約十五枚前後の短篇である。」「約」の字がいくつ用いられ，それぞれその訓讀みはどうかを先づ調べてみる。

23) ルビ，和文活字の七號活字の大きさにほぼ等しいイギリスの活字の古い呼稱から《振り假名用活字または》，「ふりがな」.

24) 總ルビ，活字印刷で，文章中の漢字の全部に振り假名をつけること.

25) パラルビ，總ルビの反對印刷で組け版中のある特定の漢字にだけルビをつけること．總ルビ←→パラルビ.

（1）實やかに約りつつも（チギリ）
（2）ねがふは約し給へ（ヤク）
（3）必ず約を誤らじ（チギリ）
（4）賢弟が菊花の約ある事を（チギリ）
（5）此約にたがふものならば（チカヒ）
（6）はるばる來り菊花の約に赴（チカヒ）
（7）赤穴が約にたがふを怨るとならば（チカヒ）
（8）今夜菊花の約にわざわざ來る（チカヒ）
（9）しかじがのやうにて約に背くがゆゑに（チカヒ）
（10）一旦の約をおもんじ（チカヒ）
（11）伯氏は菊花の約を重んじ（チカヒ）

以上である。更に「チカヒ」の漢字を「約」の他に，「盟」の字を當てたもの二ケ所，

（1）『…かつめで，かつよろこびて，終に兄弟の盟をなす。…』
（2）『…盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。…』

である。「盟」とは，いけにえの血をすすって神に告げて約束を固めると云う，口頭による約束の「誓」よりは深刻なものである。同稱に日本語の「ちかひ」も「血交ひ」に起原すると云われているがその「ちかひ」を赤穴と左門の二人は交わしているのである。またこの物語は，男同志の「まこと」と「信義」の美しさ，尊さを描いたすがすがしい，簡潔な短篇である。所で秋成は，

（1）實ある詞を便りにて（まこと）
（2）信ある言を告なば（まこと）
（3）互に情をつくして（まこと）
（4）赤穴は信ある武士なれば（まこと）
（5）歸り來る信だにあらば（まこと）
（6）賢弟が信ある饗應を（まこと）
（7）兄長赤穴は一生を信義の爲に終る（ルビなし）
（8）驗を藏めて信を全うせん（しん）
（9）只信義をもて重しとす（ルビなし）
（10）命を捨て百里を來しは信ある極なり（まこと）
（11）横死をなさしむるは友とする信なし（まこと）

(12) 私に商㕝叔座が信をつくすべきに（まこと）

(13) 吾今信義を重んじて態々ここに來る（ルビなし）

(14) 兄弟信義の篤きをあはれみ（しんぎ）

右の諸例の稱に，「まこと」を「實・信・情」の漢字に當て，「信義」にはルビがなく，ただ末尾のみ「信義」に「しんぎ」とルビを付けた。「信・信義」の多用は勿論この物語が「信義」（まこと）を中心テーマとしているからではあろうが，左門の實（＝實意）が赤穴に信（＝誠信）を感じさせ，兄弟の盟（ちかひ）をかため，さて，別れに當って情（＝交情）をつくして約り（チギリ）を交わし，後日再會の約（ちかひ）を果すためには赤穴は自ら生命を捨てる。その信義に感じた左門は，一命を賭して單身彼地に乘り込みその仇を討って赤穴の信義に報いる。こうみれば，「まこと」の表記が「實→信→情」，そして「しんぎ」（信義）へと變化する過程に，秋成の用字の意義が感じられよう。

さきに「約」の訓み方を見て來るが（標題が一ケ，「チギリ」が三ケ，「チカヒ」が七ケと計十一の「約」があった。しかも「チギリ」とルビのあるものは何れも左門の言動に關して居り，「チカヒ」の場合は赤穴のそれに限っている。（(2)の「ヤクシ」は，單に再會の日取りの約束と云う普通の用法である。）

元來，ちぎりとかちぎるとかは，男女の交わり，つまり性愛的な表現である。女が男とちぎり，男が女に心の變らぬことをちかふ。ちぎりとちかひとは，受動と能動とである。これが男と男となれば，所謂「衆道關係」における「若衆」と「念者」である。ちぎりとかちかふとか，振り假名だけを取り上げてみると，どこか赤穴（兄分＝念者）左門（弟分＝若衆）兩者の間に，性愛的なもの（男色＝衆道）を感じさせられる。武士社會における男色は珍しくない事實であったし，また衆道のための仇討談も西鶴[26]やその他の作品にも扱われても居り，この作品もそうした要素を暗示加味した信義に殉ずる武士氣質を描いた復讐談の一種でもあるとも言える。

然し，約をちぎり，ちかひと訓讀することで左門，赤穴に性愛關係をみることは，いささか飛躍かも知れぬ。但し，この物語は，左門の視点を中心に構成されているが，更に强引な附會を行なえば，この題名「菊花の約」そのものである。本文中にも「菊花の約」と云う言葉が，先きに擧げた通り四ケ所。左門の場合は「ちぎりであり，赤穴では「ちかひ」であるが，勿論題名も左門の立場からの表示であることはこの訓が「ちぎり」である事からも知れる。さて，「菊花」と云う孤高にして清冽なイメージを先づ讀者に與える。更に，「菊」と云う言葉から來る男色への連想。左門と赤穴のちぎりは菊花におけるそれ—菊花の約ではなかったか。こんなことまで考

26) 西鶴井原西鶴(1642－1663)俳人，小說家，浮世草子作者「好色一代男」，「好色一代女」など多くの著がある.

えさせられるのが，「約」に付した秋成の訓みであり振り假名であつた。

（付註）

赤穴と左門との間に性愛關係を嗅ぎとった松田修，鵜月洋兩氏の論考があるようだが，これが作品に與える効果についての兩氏の評價見解は全く對蹠的である由（筆者未見）。ただ本稿に於ては，こうした性愛關係的なものが讀みとれると云う事を述べたに過ぎない。

Ⅱ 結　　論

「菊花の約」は「陰德太平記」の記事を背景に，舞台を文明，永正頃の人心の混亂しきった戰亂の世に設定した。また主人公達を，自己の榮達と保身のために不信義を行って省みない當時の武士社會からの逸脱者として設定することによって，主人公達が邪惡，不信義を憎む己の信念のおのずからなる表われとして命を捨ててまで一言の約束を守り，また不信義者を糾彈することによってその靈に報いるという，嚴しく純粹な信義の士達の心情と行爲とを通して，信義の地に落ちた當代の武士世界への批判と，信義に殉じる者達崇高な美しさを訴えるという主題のもとに構想されている。秋成は原典の奇談を巧みに取り入れながら，その構成の破綻を繕い，信義に徹した者達の凛冽な美しさを描き出したところに，典據とした文献や作品から多くのものを取り入れながらも，作品の獨自性と文藝的價値を高く主張する，秋成の翻案力と構想力が示されているということが出來るであろう。

「菊花の約」において，左門と赤穴の再會の約束が，一言のもとにとりきめられた偶然的な日取りであればあるほど，それは守らなければならない。いわばそれは人間信義の上に紡がれた一筋の絹糸のように，かぼそいものである。すなわち一言の約束，それがあまりにも輕視され，破られることが多い。そういう現實に對する抵抗こそ，左門たちが命をかけて守り通そうとする生活の本質的意義だったのである。ひと突きつけばくずれそうにみえるこのむなしさこそ，もっとも頑强な一線だったのである。

「范巨卿鷄黍死交生」である原話は庶民世界の信義談に相應しく，庶民の意識，判斷の枠を外れない。一年後の同じ佳節に定められる再會の日取りは，それとして妥當であり，讀者の心に現實感を呼び起す。これに對して，主題をなす再會の誓いがこわれやすいものであればあるほど，それにすべてを賭ける信念の强固さ，美しさを顯在化する。いささか編執的とも見える意志の强さは，このかぼそさが呼び起こす不安定さと奇妙な調和を保って，信義應酬の場を强烈な感動に卷き込む。すべて精神美に統括しようとする秋成の構想を如實に示すものである。それは，一輪の菊花が象徵

するかよわさと，守節の嚴しさとして，我々の胸中に强く刻印され，この物語の展開を導いた動力をなしたものであった。ふとしたきっかけから，ほとんど戯れのようにして，なされた約束……。そうした約束であっても，一旦それが成立してしまえば，命を捨ててまでその約束を守ろうとするのが，信義というものであり，そこに人間の美しさ，强さが存する。と同時に，そんな約束でさえ，踏みにじって生き拔くことが出來ないところに，人間の弱さ，哀しさがある。秋成は，この二人にそうした意味での本當の人間の姿を見たのである。

—國 文 抄 錄—

「菊花の 約」에 대하여

江戶時代의 作家, 上田秋成(一七三四)의 文學, 特히 「雨月物語」라는 怪談小說은 그 幻想的이고도 浪漫的인 題材와 日本과 中國의 古典知識을 驅使한 美文으로써 많은 愛讀者를 갖고 있다. 「雨月物語」의 第二話 「菊花の約」는 中國의 白話小說集 「古今小說」의 「范巨鄕死生交」의 翻案이다. 秋成은 原話에 苦干의 改變을 加하고 그 自身의 美의 世界를 創造해 왔다는 것이다.

이 「菊花の約」는 主人公 播磨國加古(兵庫縣加古市)의 丈部左門이라는 學者는 近江에서 出雲으로 돌아가는 途中, 急性傳染病에 걸려 있는 赤穴宗右衛門이란 武士를 만나 親切하게 看病하여 回復시킨다. 서로 이야기하는 中에 意氣投合하여 義兄弟가 된다. 얼마後에 赤穴는 重陽의 名節날에 돌아올 것을 約束하고 먼저 出雲으로 떠난다. 再會의 約束날인 九月九日에 左門은 아침 일찍부터 準備하고, 赤穴의 돌아옴을 苦待하고 있었지만 밤이되어서도 相對는 모습을 보이지 않았다. 밤도 깊고 斷念할 수 밖에 없는 채, 門을 닫으려고 할때 겨우 나타난 것이 赤穴의 亡靈이었다고 하는 것처럼 「菊花の約」는 自盡하여 亡靈이 되어서 까지 約束을 遂行한다고 하는 이야기인데 宗右衛門의 友情과 義理있음을 主題로 한 것이다.

幽暗한 怪異世界의 戰慄的인 美를 中心으로 하는 「雨月物語」에 있어서 信義를 貫徹하는 男性之間의 友情의 아름다움과 嚴함을 描寫한 것으로 有名하다. 또 이 信義는 當時의 日本武士社會의 退廢한 動態와 對立하고 權謀術數를 일삼고 保身과 榮達을 위해 計略을 꾸미는 한 處世方法에 冷酷한 比判의 意味를 內包하고 있는 것이고 邪惡, 不信義가 橫行하는 當代武士 社會의 相態를 사정없이 糾彈하기도 하는 것이었다.

以上과 같은 대충 줄거리를 가지고 展開되는 「菊花の約」에 關해서, 本論에서는 우선 그 典據를 探究하고, 그것이 어떻게 이 作品에 取入되었는가를 살피고, 더우기 이 作品에 使用된 描寫의 方法, 背景을 叙述함으로써 抒情을 表現하고 抒情을 表現함으로써 叙景을 連想시키는 技巧와 이 作品의 테마라고도 볼 수 있는 冒頭部分과 末尾部分의 照應에도 抵觸하여 보았다. 即, 「輕薄の人と結ぶことなかれ」라는 前後에서 輕薄한 人間을 直接삼가게 하고 內容은 그 反對의 實例를 들어보임으로써 信義를 보다 더 强化했다. 最後와 最初가 같으니만큼 다시 한번 冒頭(글의 첫머리, 序頭)로 돌아오는 것같은 感情을 느끼게 한다.

最初는 單純히 緊張된 好奇心을 갖고 읽어 온 것이 最後에는 純然한 깊은 感動으로 다시 한번 悠悠히 鑑賞한다.

이래서 그 小說은 머리도 꼬리도 없는 無限히 巡迴하는 이상한 하나의 수레바퀴이다. 永遠토록 사라지지 않는 餘情이 가득찬….

最後에 作者 獨特의 漢熟字에 단 振り假名 「約」의 토에 대해서 때로는 「チカヒ」, 때로는 「チギリ」로 읽히는 경우의 差異도 考察해 보려고 한 것이다.

秋成은 이 一篇에 있어서 若干 偏執的이라고도 볼 수 있는 意志의 强한 点이 있기는 하지만, 이 意志의 强함이 纖弱함이 불러 일으킨 不安定함과 奇妙한 調和를 이루어, 信義應酬의 場面을 强烈한 感動으로 끌어 넣는다. 모든 것을 精神美로 統括시키려는 秋成의 構想을 如實히 나타내는 것이다. 한 송이의 菊花를 象徵하는 가냘픔과 엄격한 守節로써 우리들의 가슴 속에 强하게 刻印되며 이 小說의 展開를 이끌은 動力에 이른 것이었다. 뜻밖의 動機에서 거의 농담 같이 成立된 約束…그런 약속일지라도 一旦 그것이 成立되 버리면 목숨을 버리고 까지도 그 約束을 지키려고 하는 것이 「信義」라는 것이며, 그곳에 人間의 아름다움, 强함이 있는 것이다. 同時에 그런 約束마저 짓밟지 못하고 살아가지 않을 수 없는데에, 人間의 弱함, 슬픔이 있는 듯하다. 筆者는 이 두사람에게서 그러한 意味의 眞情한 人間의 모습을 본 것이다.